まじわり 148 号

2016 年 3 月 13 日発行

【巻頭言】『神様の誓いと約束』

司祭 バルナバ 菅原裕治

今回は、「ヘブライ人への手紙」六章から学びます。五章では、主に信仰の「従順」について述べられていましたが、六章は、「誓い」と「約束」について述べています。

六章の冒頭は「だからわたしたちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。」とあります（六・一～二）。これらの文言は、せっかく学んだキリスト教に関する初歩の教えを捨てるように勧めています。それは、「あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです」（六・一二）とある通り、信仰に加えて忍耐、約束のもの受け継ぐためです。

初歩であっても教えを捨てることを勧め、しかし、忍耐と従順さを通して神様の約束を受け継ぐ、それはいったいどのようなことでしょうか。この個所はそのことについて、忍耐強く待ったが故に約束のものを得たアブラハムを例に挙げて述べています。「神は、アブラハムに約束をする際に、御自身より偉大な者にかけて誓えなかったので、御自身にかけて誓い、『わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす』と言われました」（六・一三～一四）。最初に神様の「約束と誓い」が語られています。何故、約束と誓いが二重に出て来るのかを考えてみますと、神様とアブラハムとの関係は、単なる約束の成就ではなく、約束と誓いの間にある、その子イサクを捧げるほど信仰の危機を経験しながらも、忍耐を持って待ち続けたアブラハムの姿が重要だからです（六・一五）。

約束とは相互の契約であり、誓いとは一方的な契約です。それ故、神様が誓うとは、神様には人間の理解を越えた神様の不変の計画があり、そのこと自体が信仰者にとって保証なのです（六．一六～一七）。神様の不変の事柄によって、神様に望みを得ようとしている信仰者は、約束を通して力強い励ましを得るのであり（六・一八）、その望みは、信仰者を不動のものとする「錨」となり、更に本来大祭司しか入れない聖所の幕の内側に信仰者を入れるのです（六・一九）。そしてそこには、既に信仰者の先駆けとしてイエス・キリストがメルキゼデクに等しい永遠の大祭司としておられるのです。

学んだ初歩を捨てる、しかし、約束のものを得る。これは努力を重ねて何かを達成するという生き方とは、異なる歩み方を示しています。人間的な思いを超えるという厳しさがあると同時に、そうであるからこそ達成できる神様の義、本当の平和を実現するという恵み、それがその歩みにはあるのです。

そのような歩みという視点から預言者を思い起こしてみると、高貴の出であり極めて知的であったイザヤは、神様の召命によって、人々から軽蔑されるような預言活動をします。イス

ラエルの愛国者であったエレミヤは、バビロンへの降伏という預言を与えられ、人々から裏切り者あつかいされます。浄不浄を規定する祭司の出身であったエゼキエルは、神によって浄不浄の廃棄を命じられます。アブラハムの場合は、イサクを犠牲として捧げよと、一度与えられた約束を取り消されるような命令を下されるのです。それらの人々の心理描写は聖書にはありませんが、神様は、意地悪なほど人間が一番大事だと思っている事柄、守りたい、保ちたいと思っている事柄を指摘し、人間がそれらを捨てる試練を経験した後に、神様の不動の誓いを示すのです。そして何より神様自身も、その御子イエス・キリストを十字架の犠牲に捧げて、本当の愛をわたしたちに示し、わたしたちを愛することを誓っておられるのです。そうであるからこそ、イエス・キリストを通して示される神様の誓いは、神様から誓いを受ける信仰者にとって本当に確かなのであり、そこにある約束は、信仰者を不動に希望に他ならないのです。

神様の誓いと約束、この二つとを通してわたしたちは、すべての希望が、この世にではなく神様にあることを認識して、再びこの世に関わることを求められます。その関わりとは、この世で神様から自分に与えられた使命を認識することです。そしてその使命は人間一人ひとりに必ず与えられています。わたしたちは、これからも聖パトリック教会で集まり、祈り、宣教の業に参与します。その交わりの中で、神から一人ひとりに与えられている使命、神様から必要とされている事柄が、何であるかを祈り求めていきたいと思います。